
主観論

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主観論

【Nコード】

N7585C

【作者名】

都神紗茅

【あらすじ】

ある曲を聴いて思いついた短編の集まりです。あくまで『思いついた』話ですので、曲自体のシチュエーションとは違う話が多くなると思います。また、季節がバラバラだったり全体の統一感が全くなかったりすること間違いなしです。なので、それらに関する批評や苦情は受け付けません。それでも読んでいただける方のみ、この先にお進みください。【全6話＋後書きとなっています】

PERFECT CRIME

今宵は満月。日中はこの上もないくらい晴れ上がっていたので、陰りの気配さえ全くない。

無傷のまま地上に届いた月光は、或る一人の小さな少女を控えめに照らしていた。

「綺麗ね……」

あまりにも優美な楕円形に、いつもは他人に隠している本音を思わず漏らした。

面倒だと室内で塞ぎ込んでいなくて良かったと言う思いが彼女の中を廻る。

それらが急に立ちきられたのは、ある物体が彼女の目に入ってきたからだった。

「あら？」

平和な闇夜を切り裂いていく、純白の飛行物体。それは大きく周回してから、彼女の視界の中心に落ち着いた。

音もなく澄みきった空気が今宵にそぐわない違和感に震えて、彼女の耳に届く。

「こんにちは。こんなところで何をしていらっしゃるのですか？」

彼女は、彼の自分に対する言葉遣いが丁寧すぎて逆に滑稽に思えた。彼が相手に素顔を見られないがために、別の人格を演じているのはとうの昔に知れていたことだった。しかし、どう見ても年下の自分に対しては可笑しい気がした。逆に言えば、自分の真の姿を見透かされたような。

「特に理由はないわ。そう言う貴方こそ、こんな時間にどうしてここににいるのかしら？ どうせ、いつも通り何かを掠め取って来たんでしょうけど」

「フフ、貴方には敵いませんね。確かに先程、ある美術館にお邪魔してきましたよ。戴いた宝石は目当てのものではなかったので返還させて戴きましたが」

そう、と彼女は一息つくと、どこか裏のありそうな微笑みを見せ続けた。

「貴方が本当に求めているものが一体何なのか、いつか教えてくれる？」

彼は仮面をはぎかけてから、それを誤魔化しまかすために笑みを浮かべた。彼のそんな姿を彼女が動揺だととらえるのに、全く時間はかからなかった。

「残念ながら、それはありませんよ。知られる前に私は目当てのものを手に入れ、暗闇に紛れるでしょうから」

彼の言葉に、彼女は魅せられるように汚れなき満月を見上げた。思わず彼も彼女に倣い、その視線の先を追った。

「全てがそう簡単に行くかしらね？ 完全犯罪なんてこの世には存在しないわよ」

彼女の挑戦的で強気な発言に、彼は翼を広げる仕草を彼女にわざと見せた。しかし彼女は動じるどころか、突っ立ったままで何もしようとしなない。

そんな姿が軽く癢しゃくに触り、彼は彼女を動かそうと言った。

「貴女はあの名探偵に似たことを言いますね。面白い、本当にそうなのか証明してみせましょうか？ いつの日か、今宵のような満月が現れるその時に」

そして白鳥が華麗に飛び立つかの如く、彼は彼女の前からあつという間に姿を消した。

その様子は一見美しいと思えるが、彼女からしたらただ逃げたようにしか見えなかった。しかし、そんなことは、彼女にとって一切驚かない、当たり前なものであり周知の事実でもある。完全犯罪を目論む者が、のんきに逃げずにいる理由はない。

（私も、またいつか貴方に会いたいものね）

そう心中で呟くと、彼女は何もなかったかのように満月と彼のいた場所に踵を返した。

P E R F E C T C R I M E (後書き)

『P E R F E C T C R I M E』倉木麻衣さんの曲です。

nostalgia

「うわあ、めっちゃ綺麗な桜ア」

「そやな」

新大阪から新幹線でたったの一駅。近くどころか隣の府なのに、全くと言っていいほどの二つは違っている。

春休み、平次と和葉は、和葉からの提案でこの京都へやって来た。桜咲き誇るこの街は、それを一目見ようと集まった人間がまず目につく。しかし平次と和葉の瞳に、彼らの姿は映らない。

「柄にも似合わんと見とれてるん？」

「自分、やかましいなア」

隣で惜しげもなく笑顔を漏らす和葉に、平次は口を尖らせながら悪態をつく。確かに、桜をじいつと見つめていたのは確かだった。しかしそれ自体には見とれてはいなかった。平次が本当に見とれていたのは、時おり吹く柔らかい風が薄紅の花びらをさらっていく姿を通して見えた、あの日の彼女。

それを、当の本人に見通されてしまったような気がしたのだ。

「やかましいて……あんたには情緒ってモンがないのん？」

「アホ、んなモン、ちゃんとお前こそも何も」

そう言いかけて、平次は口をつぐんだ。目の前の和葉から、表情が消える。

「へーじ……？」

顔を傾けて自分を見つめる視線に耐えられず、平次は思わず目を背けた。

（いや、何も分かってへんのは……）

もちろん、情緒の話ではない。

和葉の耳に、周りのざわめきがこそこそとばかりに割りこんでくる。何なに、なんでそこで黙るんや？

行き場を失った和葉の視線は、自然に桜へと引き寄せられる。音もなく咲き、散り、また芽が出る。それだけなのだけれど、桜にはやはり人を引き寄せる何かがある。和葉は、そんなことを思った。

そして沈黙に耐えられなくなった和葉は、途切れた会話をぎこちなく再開させた。

「そや、お土産。なあ平次、八ッ橋でええかなあ？」

和葉は口の端を横に広げただけの笑みを見せ、視界に入ってきた八ッ橋を指さしながら言った。和葉の目は、本人の意思とは正反対に会話を続けてほしいと訴えていた。

他人の隠された気持ちや感情を読みとることに長けている平次は、当然そのサインを見逃さなかった。内心焦りつつ、さりげなく会話を続ける。

「あー、このチョコ味なんかええんちゃう？ めっちゃ旨そうやし、試食してみ」

「食べる食べるー！」

いつもの笑顔に戻って、和葉は軽快な足取りで八ッ橋へと向かっていった。

齒がゆくてやり場のない思いを抱えながら、平次はその場に立ちつくす。

（なんや……？ この気持ちは）

一段と強い風が、平次と和葉の間を通り抜けていった。無数の桜の花びらたちが、どこか遠くへと飛ばされていく。音は一切聞こえない。

砂ぼこりが軽くなったため、平次は目をつぶった。あの日の情景

がまぶたの裏に瞬時によみがえる。

「！　び、びつくりしたあゝ。何やの、急に」

あの日の情景をそのことだと自覚できたときに、やっと平次は気がついた。思わず自分が和葉の腕をつかんでいたと言うことに。平次は慌てて手を振りほどいた。

何故だ？　微かにほてった頬を、ごまかすように、人差し指で軽く搔いた。疑問への答えはあつという間に出た。

あの日のように、桜がたくさん舞い散った風が和葉をさらってどこかに隠してしまうような気がしたから。

「で、土産は決まったんかいな？」

「まだやけど……どっか行きたいところあるん？」

「まあな。お前がのろまやから、何か眠くなってきたなア」

「だ、誰がのろまや！　もう決まってるて」

和葉はそう言っている１つの八ツ橋の箱を持ち上げて、平次に、これを買うのだと示す。

「そんなら早よせえ。これから予定がぎっしりなんやから」

はいはい、と平次をたしなめて和葉はカウンターに八ツ橋を置き財布を取り出した。

彼女の背中を見送ってから、平次は再度桜に目をやった。何度もなんども鑑賞する者の視線を集める不思議な『植物』に、微笑みかけられた気がした。

nostalgia (後書き)

『nostalgia』Every little thingの曲です。

LOVE & TRUTH

無機質かつ現実的なキーボードを叩く音は、地上から隔離されたその部屋に大きく響く。まるで自分の孤独を表しているみたいだと、哀は自嘲気味に口の端を引き上げた。こんなことをしたってかえって虚しくなるだけだと分かっている。それでも……

キーボードの上にあった哀の両手の動きがピタリと止まる。作業が全くはかどらなくなってしまった。哀はジョブを閉じ、パソコンをシャットダウンして、キャスター付きの椅子ごと後ろに下がる。気が緩んで思わず欠伸が出た。

哀は椅子から降り、下界を脱する扉をゆっくりと開いた。地上からは博士が見ているであろうテレビの音声が聞こえてきた。同時に人の声も。

「灰原、博士から聞いたぜ。お前、最近地下室にこもりっぱなしなんだろ？」

コナンの声だった。哀は彼が来ていることに全く気づかなかったため、内心驚きながらも地上へと出てくる。

「工藤君、いつからいたの？ 博士は」

「風呂に入ってる。で、オレがいたのは結構前からだけど、気づかなかったか？」

「ええ。ずっと地下室にいたから」

哀は、コナンが心配してくれていることを嬉しく思っていた。しかし、誰にも見つからないように心の奥底にしまつてある秘密事項にコナンが気づいてしまったことへの複雑な気持ちも同時に浮かんだ。二つの正反対な感情に挟まれて、哀はどちらへも行かずに無表情になる。

そんな哀にコナンは微かに顔を傾けてから、壁掛け時計に目をやった。午後七時三十分。時間を確認してから、また哀に視界の中心を合わせた。

「ま、あんまり無理すんなよ？ 何か心配事とかあったら、溜めこまないでちゃんと言えよ」

何も知らないコナンは、余裕丸出しの微笑みさえ浮かべながら哀に言う。その哀は、表情を変えないまま声にしない問いかけをした。

（私があなたに相談しても、その表情のままでいられるのかしら？）

そんなわけがない、と無意味に反語表現にまとめてから、コナンのあとに言葉を続けた。

「それより、あなたこそ大丈夫なの？ この時間だし、彼女が美味

しい夕御飯を作って待つてゐるんじゃないかしら」

さっきの聞こえない問いかけと素直になれない気持ちと喜びを押し殺し、哀はきっぱり言った。

突然の話題の転換にコナンは、ああ、と思い出したように言う。

「夕飯ならもう食ってきたぜ。博士がああ言ってたから、お前に直接聞こうと思ったからよ。明日は土曜だし、歩美たちと泊まり込みで博士の新作ゲームをするって蘭に言っておいたしな」

哀にはコナンの言葉が、耳を通じて心を浸していくように感じられた。どこかも知れないところにいた自分を、彼は探しだしてくれたのかと思っただくらいだった。しかしそれは、一瞬で一筋の光もない闇に葬り去られた。この悩みは、コナンによって解消されるわけではないことを、他の誰でもない哀自身が一番分かっていたからであつた。

LOVE&TRUTH(後書き)

『LOVE&TRUTH』YUIさんの曲です。

恋のつぼみ

「おはよう和葉！」

「おはよー」

いつもと変わらない朝、和葉は自らの席に着いた。周りは皆、朝のミニテストの勉強をしていた。ただ一人を除いては。

彼は、机の上に何も置かずにつ伏していた。何故かは和葉は知らなかったが、毎日のように彼がこうしているのは目にしていた。

和葉は、彼の前の席に腰かけて彼に話しかける。

「平次。平気なん？ 今日のテストの範囲、難しいトコなんか」

寝ぼけ眼を、彼こと服部平次はうつとうしそうに擦った。それも当然だ。たった今まで眠りの世界に入り浸っていたと言うのに、和葉の愚問のせいで目覚めさせられたのだから。

和葉自身も、それが愚問だと分かりきっていた。平次との会話のキツカケを見つけたかっただけで発した言葉だったからだ。

「自分こそ、他人の睡眠を邪魔してる暇なんかあるんか？ あん」

「ア、アタシは家でちゃんと勉強してきたで？」

また痴話喧嘩が始まったと、周りは和葉と平次の会話に耳を傾けた。当の本人らはそれには全く気づいていなかった。

「ずっと気になってたんやけど、お前、頬に枕のしわの跡ついてるで」

にやにや口の端を上げながら、平次は和葉にその言葉を投げつけた。勿論それは、彼の得意技による『和葉をからかうための嘘』である。探偵と言う職業柄、他人を引っかけるのは得意であった。

そんな服部の目論見通り、和葉は慌ててポケットから手鏡を取り出した。それを開き、懸命に、ありもしない枕のしわのあとを見つけて出そうとしていた。

あまりの和葉の騙されように耐えきれなくなり、平次は思わず吹き出した。

「この女、本気で探しとる！ しわなんか最初からあらへんで。普通はすぐに気づくやろ、ハハっ」

もはや涙が目尻に浮かぶ程笑っている平次。和葉は手鏡とそれを見比べた。数秒経ってから、やっと自分が騙されたのだと気づく。途端に、顔が熱く煮えたぎるように感じられた。

「騙したんやな！ 最悪っ」

「騙される方が悪いんや。これからは用心するんやな。なア、かー」

ずーはーちゃん？」

「へ、平次のドアホ！」

和葉はそう叫ぶと、自らの席に戻って鞆から教科書類を取り出した。顔の赤らみを隠すために、それを壁にしようと考えたのだ。

少しして、和葉は恐る恐る教科書から少しだけ顔を出して平次の様子を窺^{うかが}った。三分の一程しか顔は出ていないが、和葉の席は最後列のため教室内がほとんど見渡せた。

そんな中、和葉の瞳は教室の前の方に、見慣れない二つの影を捉えた。恐らく一年であろうことだけは予想できた。

（あの子ら……こんな朝から何なんやる？）

そんなことを和葉が思っていると、その2人の女の子たちは『目的』の人物の名前を呼んだ。

「服部先輩！」

和葉は目を見開いた。別に驚いた訳ではない。校内外問わず、平次に人気があることはとうの昔から知っている。当然、告白を良くされていると言うことも。

和葉は、そんな女の子たちのことが何だかとてもなく羨ましかった。自分の気持ちを、素直に伝えることのできる勇気があることを。

素直になりたい。自分の気持ちを伝えたい。和葉が何度も思った経験のあることだ。しかし、それが実現したことは一切ない。

「服部イ〜！ 何や、手作りのクッキーなんか貰いよって」

和葉の耳に、クラスメートの声が突き刺さる。その途端に彼女の中で、何かが音を立てて崩れ落ちた。平次が女の子と接している時に、彼女がいつも出会う感覚だ。

ようするに、ヤキモチだ。平次の顔を見る和葉の視線も段々と陰しくなる。

「めっちゃ旨ッ！」

そう叫んだ平次に、和葉は思わず歩み寄った。スカートを大きく揺らしながら、がに股でやってくる和葉に平次は目を丸くする。

「な、何や？」

「そのクッキー、食べんといて！」

「……は？」

言えた……。少しだけ素直になれた。和葉は真っ赤な顔をぺちぺち叩きながら、不思議がっている平次を無視してその場を後にした。

恋のつぼみ（後書き）

『恋のつぼみ』 倅田來未さんの曲です。

Addicted to you

とにかく、そこには真っ白な景色が広がっていた。そこに立っている彼女に分かるのは、その場所は物凄く居心地がいいことだけだ。

「蘭」

自らの名を呼ばれて、蘭は躊躇^{ためら}いがちに振り向いた。その先も、ただただ真っ白が続いているだけであつた。しかし、その中に目を凝らすと、一つの影が浮かび上がってきた。それが蘭側に向かつてくることはなく、突っ立っているだけだつた。

「ただいま」

細長いその影は、蘭に向かってそれだけを言う。その影の言葉に、蘭は両目から大量の涙を流した。

蘭自身も、何故こんなに泣いているのか自分で自分が理解しがたかつた。滝のように涙を流す自らを蔑^{みけず}む程であつた。まるで、他人の目から自分を見ているみたいなの……

『これは夢?』

そんなことを蘭が自覚した途端、真っ白な世界と一つの影は一瞬

にして消え去った。思わず、影に向かって出来る限り手を伸ばした。
ある言葉と共に。

「しんいちー！」

気づけば、蘭の瞳は蘭の部屋の天井を映していた。見慣れたそこから視線をずらして、蘭は目覚まし時計に手を伸ばして現在の時刻を知ろうとする。

「もう六時半か……朝ごはん作らなきゃ」

だるい体を無理矢理起き上がらせて、蘭はあくびを一つする。そしてさっきまで見ていた夢を、パズルのピースを一つひとつ集めるように思い出していく。

（真っ白な世界で……新一が遠くにいる夢を見るの、何度目だろ？）

蘭はうつすらと汗ばんだ額に手をあてて、不確かな記憶を辿っていく。しかし、人間は一日のほとんどの出来事を忘れてしまうもの。近くて遠いその日に見た今日と同じ夢は、蘭の記憶の中にはいなかった。

「最近、真さんから連絡ないのよね」

朝の夢を覚えているまま学校に行った蘭。昼休みに、園子からそんな独り言じみた言葉を耳にした。

どこか寂しそうにしている園子に、蘭は励ましの意味を込めた言葉をそつと渡した。

「心配しなくても大丈夫よ。京極さん、忙しいだけだろうし」

「蘭は平気なの？ 新一君からずっと連絡がなくても」

「え……」

らしくない園子と彼女からの思ってもいなかった返答に、蘭は言

葉を詰まらせてしまった。それには、もう一つ理由があった。蘭自身も、しばらく新一と連絡を取っていなかったのだ。新一が忙しい身であることを考えると、中々用もなしに電話できないものだからだ。

黙り込んだままの蘭に、園子はしびれを切らしたかのように呟いた。

「ごめん。蘭に当たっちゃって、わたし……どうかしてるよ」

「うつん、そんなことない。わたしだって、ずっと連絡がなかったら、心配くらいするもの」

蘭がすぐにそう言うのと、園子はそれを待っていたかのように表情を百八十度変えて笑った。

我が目を疑っているように自分を見てくる蘭に、園子は笑顔を保ったままで言った。

「真さんから全然連絡がないのは本当よ？ 毎日まいにち、真さんのことばかり考えてるもの。わたしね、蘭の素直な気持ち聞き取ったのよ」

「もー、園子ったら」

ケラケラ笑いながら言う園子をたしなめながらも、蘭は彼女の言葉を中心に反芻していた。

（毎日まいにち考えてる、かあ）

蘭にとつて、園子の言葉は、全く分からない訳ではなかった。むしろよく分かった。確かに自分も、毎日新一のことを考えているからであった。些細な出来事が起これば新一にも教えたいと思い、街を歩く恋人たちを見れば真っ先に思い出すのは新一のことであった。

蘭は思わず箸を置いて、鞆^{かばん}から携帯電話を取り出した。ディスプレイに目をやる。しかしそこにはいつもと変わらない待受が映っているだけ。返信の存在を期待していたため、蘭は寂しげに携帯電話をたたんだ。

（アイツが事件で色々忙しいって分かってる。でも、やっぱり）

蘭はそんなことを思いながら悲しげに笑うと、携帯電話を鞆に静かに仕舞い込んだ。

A d d i c t e d t o y o u (後書き)

『A d d i c t e d t o y o u』宇多田ヒカルさんの曲です。

朝日

眩しい。そんなことを思いながら、コナンの意識は現実へと帰還した。まだ重たい瞼を無理矢理にこじ開けると、閉められているカーテンから朝日が漏れ出ていた。

喧しい騒音をコナンに聞かせる小五郎の姿は、すでに隣のベッドの上にはなかった。そんなこともあり、コナンの外にある透明な殻は簡単に剥がれた。

「あー……眠い」

寝起きで上手く力が入らないためかコナンは起き上がるのに苦労して、そんな朝の第一関門をクリアすると、思わずあくびを漏らした。

さてお次はと、コナンはまだふらつく体を何とかコントロールして、カーテンを左右に引いた。

窓が露になった瞬間、大量の陽の光が全身を貫いた。その強さに、コナンは目を軽くつむる。いつの間に、瞼のサポートのために手までもが陽の光を遮っていたことに気づいてから、初めて巨大な光源から焦点をずらした。

「今日も、コナンのままなんだよな」

自分で分かりきっていることを自分の幼い声から聞いて、思わずコナンは嘲笑した。バツカじゃねえの、起きたら夢は醒めていまし

た、なんてことある訳ねえだろうかと。しかし段々頼だけでなく精神的にも疲れ、遂には虚しくなってきたため笑うのをやめた。

太陽は、この世界を照らしている。コナンだけでなく、この世界の他の住人、彼らの建造物から動物や自然までも。今日も爽やかな朝を彩るために、鳥の囀りや街のまだ疲れていない喧騒と共にあった。そんな景色を見ながら、コナンはしばし現実から抜き足差し足忍び足で逃げていく。

「コナン君？ 早く起きないと遅刻するよ」

蘭の声が扉の外から聞こえて、コナンは自らの思考から引き戻され窓の外から急いで目を逸らした。そして、数秒遅れて扉の向こうの蘭に叫ぶ。

「はい！」

「歯みがき粉切れてたでしょ？ ごめんね、今日中に買っておくから」

「うん。ありがとね、蘭姉ちゃん」

甘い玉子焼きを口に含みながら、コナンは蘭に笑いかけた。
そんなコナンの笑顔と言葉に微塵も違和感を覚えないまま、蘭は
また視線を戻した。

蘭の箸を使って器用におかずを取り分ける姿も、もう何度見たの
だろうかとコナンは思い返す。それから、全てを終えた後、こんな
に近くにいたと告白した暁には、一体彼女はどんな反応をするだろ
うと考えてもみる。

（やっぱ、怒るよな。近くにいたのになんで言わなかったんだって）

「どうしたのコナン君？ さっきからボーッとしちゃって」

「え？ 別に何でもないよ」

蘭はふーんと言って、また食事に戻る。

そんな蘭を気にしながらもコナンは時計に目をやる。何と、コナ
ンがいつも登校を始めているほどの時間であった。とくれば、いつ
もの『あの』時間である。ちなみにその『あの』時間とは……

「コーナーーン君！」

玄関の向こうから聞こえてくる声の塊。それを理解した瞬間、コ
ナンは無意識に頬をひくつかせた。それと真逆の明るい表情で、蘭

は立ち上がり玄関へ向かっていった。

「コナン君！ もう皆待ってるわよ」

「はあい」

コナンの声は、他人からしたら如何にも不機嫌なものである。しかし本人の気持ちとは、イコールでは繋ぐことはできなかった。マジックミラーに似た透明な殻に収納されているそれは、本人以外の誰にも見えない。

今日もまた、ありふれた一日が始まってゆく……

朝日（後書き）

『朝日』ケツメイシの曲です。

後書き

いかがでしたか？ タイトル通り、私の主観で書いた作品でしたので中々理解しづらかった箇所もあったと思います。また、各話の後書きには原曲にのちよつとした紹介しか載せていなかったの、ここで後書きを兼ねて全話の解説等を記しておこうと思います。

第一話『PERFECT CRIME』（by・倉木麻衣）……あの夜、盗みから帰還したキッドと満月に惹かれて外へ出た哀が偶然出くわしたと言う話です。個人的に哀の台詞が気に入ってます。また、この話は全話の中で一番分かりやすい話だと考えていますが……どうでしたか？

第二話『nostalgia』（by・Every little thing）……映画第七作・迷宮の十字路と多少関連した話になっています。平次が十字路以来に和葉と京都へ来て、平次が昔の回想等に浸っている様子を書きました。

作者が関東生まれ関東育ちの身故、^{ゆえ}関西弁に大分違和感があったと思います（＜―＞） ちなみに裏設定ですが、文中で平次が「予定がたくさんある」みたいなことを言いますよね？ あれは、実は昔に和葉が鞠についていたお寺に行く予定も含まれているんです。

第三話『LOVE&TRUTH』（by・YUI）……一番分かりづらい話ではなかったでしょうか？
登場人物は哀とコナン。

簡単に言えば、哀が最近地下室にこもりっぱなしと博士から聞いたコナンが、その哀を心配して訪ねてきた……と言う話です。

文中では哀の『悩み』をあえて表記していないため、ここで書いておきます。それは、コナンに対する思いを自覚してしまったと言うことです。自覚したところで、コナンに自分の思いが届くことがないことを分かっている、そのやり場がなくて悩んでいる、と。とにかく、この話は哀がコナンを好きなだけと言うものじゃないのかな、と考えていただければ幸いです。

第四話『恋のつぼみ』（by・倅田來未）……第二話と同じく、関西弁に違和感があったと思います。同じ登場人物なおかつ関西の話ですが、これら二つの話は別物と考えて下さい。

改方学園での、朝の平次と和葉のやりとりの話です。素直になれる他の子たちを羨ましいと思いつつも、やっぱり平次を渡したくないと思う和葉の複雑な恋心を表したつもりです。

第五話『Addicted to you』（by・宇多田ヒカル）

……蘭の、無意識に生まれる新一に対する思いについて書いた話です。全話の中で一番原曲に沿えた話かなあと思っています。

前から原曲が好きでよく聴いていたため、これをベースにして話を書きたいなと思っていました。

第六話『朝日』（by・ケツメイシ）……最終話にして、コナン主役の話です。コナンの、小さいままでまた一日が始まることへの様々な思いを書きました。

大体こんな感じでしょうか。まだ疑問が残る方がいらっしゃるかもしれません。メッセーヅにて遠慮なくお送り下さい。

それぞれの話自体は勿論のこと、こんな長つたらしい解説を読んでいただき本当にありがとうございました。

2007・10・26

都神紗茅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7585c/>

主観論

2010年10月10日11時43分発行